アメリカにおけるオープン・エデュケイション（その三）

白井堯子

PTA活動・地域社会と学校のつながり

十月、十一月号において、オープン・スペイスの学校建築、I・G・E（Individually Guided Education 個別指導教育）、それに伴うティーム・ティーチング制、無学年制などを特徴とするグリア小学校の内容を記したが、そういう特色ある教育を支えているPTAのことについても簡単に触れてみたいと思う。

アメリカで生活していると、ああ日本と違うなあ、と思うことが沢山あるが、その一つはアメリカ人の強いコミュニティ・スピリットである。しょっちゅう引越しているにもかかわらず、彼らは常に自分の出身州を誇り、自分が現在住んでいる地域を大事にする。大事にするとは、その地域の自然や施設を利用するだけでなく、逆にその地域の改善に自分が貢献することだ。その端的な現われが労働力提供、つまり奉仕活動である。

地域社会で最も重要なものの一つはもちろん小学校だから、小学校は遠慮なく親に奉仕を求める。親は都合が悪ければ断われればよいので、ことは簡単だ。たとえば丁度暇な時に電話で学校に呼び出された私の夫は、大きな木の箱にペンキを塗ってくれといわれてびっくり仰天、アメリカ人と違ってペンキ塗りの習慣がないので、靴までペンキだらけにして大奮闘し、「アメリカに来てペンキを塗らされるとは思わなかった」と苦笑いしていた。しかし、その間、先生や生徒とワイワイ話をし、学校の備品と同じペンキを手にベタベタつけて、この学校との連帯感を文字通り肌身で感じたというから面白い。

奉仕といえば、とても印象的であったのは学校の校庭づくりである。グリア小学校は郊外の森を切り開いてつくったので、校舎はできても広い庭には何も設備がない。そこで古タイヤ、古自転車、煉瓦、丸太

棒、タイル、木箱、その他何でもよいから不要なガラクタを供出してほしいという手紙が校長先生から届いた。広い庭にこういうガラクタが集められると、次に近くのヴァージニア大学の建築科の大学院生たちがやってきて、この材料を使い、これも奉仕で子どもの遊び場を設計し、あっという間に芸術的な遊び場をつくってしまった。親はガラクタの処分ができたし、大学院生は設計の練習をして創作欲を満足させ、子どもたちは先輩の設計に大満足でタイヤのトンネルやブランコなどで楽しく遊ぶのだ。日本ならば会社に発注しそれだけ税金が高くなるところだが、税金の節約ぶりは、誠に見事なものである。

日本のＰＴＡはわが子の教育問題、受験問題、そして親の親睦などがその主体のようだが、アメリカでは地域社会の教育のためにＰＴＡがある。だから、子どものいない人までが小学校に奉仕する。小学校には、クリスマスやヴァレンタイン・デーのパーティ、遠足など色々な行事があるが、大抵、手のあいている母親に応援が求められ、母親は大勢の子どもたちのためにクッキーやケーキを焼いたり、ジュースをつくったりして学校に届け、パーティを手伝う。親の奉仕は授業にまで及び、前回の英語の授業のやり方のところで触れたように、われわれは先生の指示でスペリングを覚えるためのゲーム教材をつくったし、日本なら大問題になるであろうが、簡単なテストの採点まで手伝うのだ。

親の授業参加

地域社会の子どもたちの教育は学校の先生だけではなく地域の大人全体の責任なのだから、親がしばしば学校に行って直接教育にたずさわる、という発想は日本にはあまりないのではなかろうか。Ｉ・Ｇ・Ｅは特に人手を要する教育法だから親の参加は常に歓迎される。〝センター〟の助手をしたり、子どもたちのワークブックの勉強を手伝ったりするだけでなく、何か特別の能力を持った親は、その能力を積極的に提供する。ギターが上手で歌の得意な母親は、音楽の時間に時々皆に歌を教える。そして子どもたちは、「今日はジョンのお母さんが歌を教えてくれたのよ！　とてもきれいな声だった」と大喜びするのだ。私が授業参観をした時には、黒人の女の子が「繰り上りのある足し算の計算がわからないからそばにいて教えて！」とやってきて、にわか先生にさせられてしまった。親の授業参加は先生の授業法を乱すこともあるが、そのマイナスよりも、友だちのお母さんから授業を受けるという新鮮な刺激が大きなプラスを生むようだ。

そこでいよいよ私にお鉢がまわってきた。何しろ学校の授業は伸縮自在だから、

◀写真1
私と娘から折紙を習う先生たち

ある時期にユニットA全員のために一週間に渡って日本特集のプログラムが組まれた。どうやら、そろそろ帰国しなければならない晶子との別れを記念してくださるらしい。日本の映画が上映され、日本の地理、歴史、生活について簡単な授業が行われ、最後にわれわれ夫婦に何か日本のことを説明せよとの依頼である。こうなったら断わるわけにはいかない。夫や他の日本人の人と相談して日本的な品物をかき集め、先ず私が折紙を実演し、アメリカ人は不器用だから〝つる〟などではなく〝ピアノ〟など簡単な物の折り方を教えた。この時晶子は大得意で、私の助手として机の間を廻って皆に教えて歩いていた。

折紙の次に夫が筆と墨を使って日本の字を説明。あまり関心はないだろうと思ったら大違いで、仮名だけでなく簡単な漢字の書き方までやらされ、大わらわであった。そして最後は、色々な品物を示して日本に

◀写真2
日本についての授業で着物の紹介

ついて話をし、晶子を使って、子どもたちが最も興味を持っている着物の着付け実演をした。彼らは、映画とは違う迫真力(?)に満足したようで、沢山の質問を浴びせてきた。

親が授業をすると子どもも嬉しいようだが、それは親にもこの上ない良い経験である。つまり、自分の子どもを大勢の中の一人として客観視できるからだ。そして家の中では気づかない色々な点を知ることもできる。小学校に一年ちょっといただけで全く英語に不自由せずのびのびと振舞う晶子の姿に、今さらながら驚いたものだ。また、毛色の変った子どもにもこんなに仲良くしてくれたユニットAの百人の暖かい友情に、ふと胸にこみあげるものを感じたのである。私の話を真剣に聞いてくれた子どもたちは、白い子どもも黒い子どもも、わが子と同じように皆可愛い。授業の後で子どもたちは沢山のお礼のお手紙をくれた。それらは今でも大事にとってあるが、アメリカの子どもたちとの触れ合いは本当になつかしい。

親はこのように学校に対して大いに奉仕をするけれども、同時に、自分たちの税金で支えている公立の学校のやり方を、その税金が有効に使われているかどうかという観点から発言をしていくという傾向も多く見られ、これはとても印象的であった。アメリカのハイウェイを走っていると建設中の道で〝あなたの払った税金はここで有効に使われています〟という意味の看板をよく見かけるが、この税金の使途に対する敏感な意識はPTAの集りでも大いに発揮されている。

あなたの学校

そのPTAの会合はいつも夜行われた。これは仕事をしている母親の多いアメリカでは当然のことなのであろうし、父親の参加者も多かった。こういった会合で校長先生がいつも強調なさったのは、〝この学校はあなた方が所有しているあなた方の学校だ〟ということであった。だから自分の家庭のようにいつでも自由に学校に来て気がついたことはどんどん述べてほしいし、より良い学校をつくっていくことを荷なってほしいというのだ。そして校長先生自身の親に対する接し方も、ずい分日本とは違っているように思えた。校長先生は、いつも学校の校舎の入口に一番近い部屋にいらっしゃる。だから何か用があって学校へ行くと真先に出ていらっしゃるのは、校長先生なのだ。日本のように校長先生は建物の奥の方にいらして、お会いするためには何人もの手を経なければならないのとは大違いである。あれでは、気安く話をしようなどという気が起こらないのは当然ではなかろうか。また日本では責任者に手紙を出して

も返事がこないことがよくあるが、責任者がすぐ返事をくれるのもやはりディモクラスィーの国アメリカである。今回この体験記を終えるにあたって、最近の情報を知るために久しぶりに校長先生に問い合わせの手紙を出したところ、グリア小学校長は私たちがいた頃と同じマーシャル先生で、部厚い資料と共に次のような回答を送ってくださった。

校長先生の手紙

私はあなたがI・G・Eに関心をお持ちになり、I・G・Eについてもっと学びたいと思っていらっしゃることを、お手紙で知り喜んでいます。あなたのお嬢さんのアキコさんがグリア小学校に在学中には、楽しい経験をなさったということを大変うれしく思います。あなたに三冊のI・G・Eについての出版物をお送りします。それらの本をお読みになればあなたの御質問はおわかり頂けるでしょうし、I・G・Eのプロセスについて、もっとはっきり御理解頂けると思います。

あなたの出された五つの御質問は、これらの出版物をお読み頂くことでおわかり頂けると思いますが、私のI・G・E教育における個人的な経験をもとにしてあなたの御質問にお答えしましょう。

①〔グリア小学校で行われているようなI・G・Eはアメリカでどの程度普及しているか？〕グリア小学校で行っているようなI・G・Eはアメリカの教育の典型的なものでも標準的なものでもありません。I・G・E教育は、全米で約十五パーセントから二十パーセントの学校によって推進されているだけです。

②〔グリア小学校で、I・G・Eは期待したような成果をあげているか？〕グリア小学校では、現時点においてI・G・Eは私の期待したように進められています。しかしながら、われわれの仕事は決して完成したわけではありません。われわれは、絶えず子どもたちの求めているものに適合するよう技術の改善を試みています。

③〔I・G・Eの長所と短所は何か？〕I・G・Eの最大の長所の一つは、教師がティームをつくり、それぞれの子どもの教育のためにより良い方法手段を発見するということだと思います。子どももまた、複数の先生といっしょに勉強していく機会を持てることです。I・G・Eについて私が考えうる唯一の短所は、I・G・Eそれ自体が持っている短所ではなくて、I・G・Eを行っている人間が持っている短所だと思います。もしも教師たちが、I・G・Eをどういう順序でやるかということにだけ頭

が向いて、I・G・E自体をどう発展させるかという努力をしないならばI・G・Eは失敗に終るでしょう。

④〔I・G・Eは小学校以外にも適すると思うか？〕現在のところ、I・G・Eは五歳から十二歳までの子どもたちに推奨されています。しかし今や、沢山の中学校がI・G・Eを始めています。それは、主に、子どもたちが小学校において受けたI・G・Eに親が満足したことによります。親は子どもが中学校に進学すると、中学校においても同じようなプログラムを続けてほしいと中学校に圧力をかけ始めています。

⑤〔オープン・エデュケイションはアメリカで減少傾向にあると聞いているが……〕あなたがおっしゃる通りオープンエデュケイションがアメリカで減少傾向を示していることは事実だと思います。しかし、オープン・エデュケイションとI・G・Eとを混同しないで下さい。両者の間には相違があると私は思うからです。I・G・Eは先生の一つの現場訓練のプログラムでもあります。それに対してオープン・エデュケイションとは、子どもたちが何でもできるようにオープン・スペイスを持った学校を建築することだともいえましょう。あるいは、子どもたちが何でも好きなことをやれることだともいえましょう。しかし、I・G・Eではプログラムがつくられており、子どもは学習において一種の詰め込み教育を受けることもありえます。アメリカでは新しい校舎を建てる時、オープン・スペイスにする傾向がありました。普通、新校舎は旧校舎の跡に建てられます。私の考えでは、オープン・スクールのいくつかが失敗した理由は、普通、旧校舎時代の教師をそのまま、新校舎に移すからだと思います。彼らの多くはオープン・スペイスの学校で教えるという希望を持っていません。彼らは非常な戸惑いを感じ、また大抵の場合、オープン・スペイスに移る前に殆ど訓練や教育を受けることができませんでした。私はもし教師たちが不愉快な状況の中に置かれていれば、何をするにせよ失敗するのは当然だと思います。

このグリア小学校を開校する時には、私は教師を募集する機会を得ました。私は六十八人の先生に面接をし、二十二人を選びました。私は、偏見のない人、熱心に働こうとする人、オープン・スペイスで仕事をしたい人、ティーム・ティーチング制度のもとで仕事をしたい人、子どもにとって学習経験をチャレンジングで実りあるものにするためにできることは何でもやりたいと思っている人を、探しました。

私があなたにお送りする出版物があなた

のお役に立てることを願っています。さらに何かお役に立てることがあれば、御遠慮なくおっしゃって下さい。グリア小学校でどうやってI・G・Eを行っているか、アメリカの、あるいは他の国の教育におけるI・G・Eの大きな可能性についてお話しするのを大きな喜びとしています。鍵は教師です。もし教師が献身的で、喜んで仕事をし、喜んで学んでいくのならばI・G・Eは成功するでしょうし。学校の運営もまたうまくいくでしょう。

フルトン・W・マーシャル・ジュニア

I・G・Eとは何か

マーシャル校長先生が送ってくださった本は、『I・G・E実施のためのガイド』『I・G・Eとは?』『学校のプログラムの改善』の三冊である。これらの本はいずれもチャールズ・F・ケテリング財団に支えられている教育開発研究所（Institute for Development of Educational Activities＝IDEA）から出版されたものである。IDEAは、一九六五年に設立され、I・G・Eを目的とする学校改造を援助しており、アメリカの教育改革運動に大きな影響力を持っているようだ。この本を読むとI・G・Eの方法もその効果を高めるために、絶えず発展していることがわかる。マーシャル校長先生の手紙に、I・G・Eとオープン・エディケイションを混同しないようにとあったが、オープン・エデュケイションはかなり広い概念で、物理的にオープン・スペイスの校舎を使う場合や、子どもによる学習の自主選択など、さまざまなものを含むようである。I・G・Eはグリア小学校のようにオープン・スペイスで行われる場合が多いし、無学年制、ティーム・ティーチング制などを採用していくのだから、オープン・エデュケイションの一種と考えてよいであろう。現に稲垣忠彦氏は『アメリカ教育通信』（評論社、一九七七年）の中でアメリカのオープン・エデュケイションを類型的に四つに分け、その二番目としてI・G・Eをあげている。（二〇四頁）

I・G・Eは教育法であって、子どもの一人一人にとって必要な教育を与えるためにさまざまな工夫をこらしたものである。それは多様な子どものための計画的な教育プログラム、個別的な学習スタイルに適した教材、大グループ、小グループ、一対一授業、独習などを有機的に組み合わせた教育法、一人一人の生徒に適した教師の配置などから、無学年別、ティーム・ティーチングなど、グリア小学校の例に見られるような実に豊富な内容を含む。これは、人種的にも文化的にも多種多様なアメリカの子どもたちにとっては、確かに有効な方法だといいうるであろう。

帰国後、日本の教育に接しI・G・Eと

I・G・Eのサイクル

『I・G・Eとは？』より

評価
ジョニィは何を学んだか。

$\frac{1}{4}+\frac{1}{4}=\frac{2}{4}$

$\frac{2}{3}+\frac{1}{3}=\frac{3}{3}$

$\frac{1}{4}+\frac{1}{2}=\frac{2}{6}$

$\frac{1}{3}+\frac{5}{6}=\frac{6}{6}$

目標
ジョニィは何を学ぶ必要があるか。

分母の異なる分数の計算の能力を示しなさい。

再評価
ジョニィは彼の目標に達したか。

$\frac{2}{8}+\frac{2}{4}=\frac{3}{4}$

$\frac{2}{3}+\frac{4}{6}=\frac{8}{6}$

$\frac{3}{8}+\frac{1}{4}=\frac{5}{8}$

学習プログラム
いかにしてジョニィをその目標に到達させるか。

ジョニィは小グループにいる時に勉強効果をあげる。彼は道具を使うのが好きだ。彼はスミス先生によく反応する。
それ故にジョニィを分母の異なる分数計算を不得意とする他の5人の子どもとグルーピングする。スミス先生が、台所計量器具を使ってその勉強を助ける。

比較すると、その長所は一段と明らかになる。日本の教育は本当に画一的で、とにかく百科辞典のような教科書をつぎつぎと詰め込むのだ。そして、どんどん落ちこぼれを生み出していく。この落ちこぼれという大問題は、I・G・Eで救うことができるし、そうすれば、家庭教師をつけたり塾に行かせたりする必要はなくなるであろう。暇のある母親が、もし親のエゴイズムでなくコミュニティ・スピリットを持ちうるならば、学校へ行って教師を助けることも可能であろう。

しかし、今の日本の現実の中では、そしていわゆる西洋的な個人主義を身につけていない日本人には、この制度を一般化することは不可能だと思われる。その理由は、第一に日本はアメリカのように異質な人間の集合でなく同質社会なので、個別教育の必要性がアメリカほど強くないこと、第二に日本の学校は現在非常な競争社会であっ

て、能力別編成は親の一喜一憂を生み、甚しい弊害をもたらすこと、第三に一人のリーダーを中心にしたティーム・ティーチング制は、日本では教師の間に反撥を招くこと、第四にオープン・スペイスの学校を建築することは困難であり、教師の数や教育費に限界があること、第五に教育過程がアメリカのように柔軟ではないので、能力に応じた教育は時にはかえって子どもに不利益をもたらすことなどがあろう。

晶子がI・G・Eによってどんな利益を得たのか、これを具体的に計測することは難しい。個別指導によって英語の力がめきめきついたことは確かだし、オープン・スペイスの部屋に置かれた豊かな教材を使って、自分が疑問に思うことを自分の力で、しかも、まめに動いて調べる習慣も身についたようだ。また、小人数教育だから、先生の話を聞いたり、ワークブックをやる時によく集中する癖もついたような気がする。だが、大勢の友だちの中で、自分を観察して自己を発見したり、刺激を得たりする機会が乏しかったのではないだろうかとも考える。けれども何よりもしあわせだったことは、彼女がグリア小学校が大好きであったことだ。彼女にとっては、学ぶことは楽しいことだった。人と競争するのではなく自分のペイスで学んでいけたこと、わからないことは何度もわかるまで教えて頂けたこと、先生方がいつも受容的に接してくださったこと……。色々な要素が重なりあって彼女に学ぶことの楽しさを教えてくれた。楽しかった授業の思い出は、何年も時を経てから結晶し、子どもの意欲となる。彼女はいう。「ヒーリー先生の音楽の時間にベートーヴェンとモーツァルトのことを習ったわ。でも、どんなことを習ったのかは全然覚えていない。先生がベートーヴェンとモーツァルトの曲をピアノで弾いてくださって、とてもきれいだった！　ベートーヴェンってどんな人？　伝記を読んでみようっと……。」

マーシャル校長先生に資料を頂いたお礼状を出す時、私はこのことを書き添えたいと思っている。

＝おわり＝

（慶応大学）